

江戸歌舞伎〈物売り〉せりふ正本考

——『金之揮』の記事をめぐって——

廣 瀬 千 紗 子

はじめに

歌舞伎における長せりふは、口跡にすぐれた役者が弁舌の技を聞かせる演技で、早く寛文期（一六六一～一六七二）には、若衆形の芸として演じられ、元禄歌舞伎の初期においては、舞台上に登場するさいの〈出端〉の芸として〈名乗りせりふ〉が述べられた¹⁾。そののち一時衰退したが、まもなく再興し、おおむね享保期（一七一六～一七三五）以降に、主として江戸歌舞伎の演技術として定着していった。

二代目市川团十郎の上演歴を記録した、享保一三年（一二二二）刊『金之揮』²⁾（後述）が伝えるところによれば、再興のきっかけとなったのは、江戸市中の振売商の口上を模した〈物

売り〉のせりふの流行で、現行の歌舞伎では「外郎売のせりふ」「白酒売のせりふ」、ならびに〈物売り〉ではないが同じく長せりふの「暫」などに伝承されているものである。この長せりふの上演にともなう板行されたのが、せりふ正本である。ここにいう正本とは、浄瑠璃正本の場合と同じく、「右此本市河团十郎直之以正本写之、令板行者也」（『ふ破伴左衛門せりふ』元禄頃。『元禄歌舞伎せりふ正本集』所収、一九八七）和泉書院などと記されるさいの、「直之正本」の意で、浄瑠璃の詞章や、一定の長さで完結する役者の口述を、正確に記した本文であることをいう。

元禄期にもせりふ正本は板行されており、数種のせりふを集めたせりふ集型のものが見受けられるが、残存数が少なく、ま

だ不分明なところが多い。一方、享保期以降の長せりふには、多くの正本が現存することが判明しており、そのほとんどは、拙稿『江戸歌舞伎せりふ正本目録稿』（演劇研究会会報）83号所収、平成二四年六月）およびその「追補」（同誌に別冊で付載）に掲げたとおりである。さらにその後確認できたものを加えると、現時点で約五七〇種、延べ約八五〇点を数える。おむねその体裁は、半紙本型の冊子一冊。丁数は二〜三丁程度の紙綴綴で、絵表紙のついた、いわゆる薄物の形態に定形化しており、宝暦期（一七五二〜一七六二）ごろからの約三〇年間に最盛期を迎えて、天保期（一八三〇〜一八四三）まで踏襲されたとみられる。

右のようなせりふ正本の残存状態からみれば、元禄期に流行した長せりふが、一時衰退したのちに再興するまでには、何らかの変遷があったようだが、そのあたりの事情については必ずしも明確ではなく、また、個別に判明している事実も、せりふ正本という点からは、あまり整理されていないようである。ひとつには、この時期の正本の体裁が一定しておらず、編年するには難があるため、前掲の拙稿解題でも、過渡期的な様相を指摘するにとどまっている。なお課題は残すものの、以下の小

稿では、『金之揮』にみられる、長せりふの記事を検討し、その傍証を掲げながら、主としてせりふ正本の板行にかかわって、長せりふの上演が定形化する前後の事情をうかがってみたい。

一

周知の書ではあるが、『金之揮』は、中本一冊。初板は全一五丁。再板は同板で、初板に前文二丁分を加えた一七丁。前文を除いた一五丁分には半丁単位で、本文の upper 段に、上演場面を描いた各二図の挿絵が配され、全六〇図を収める。刊記には「享保十三己申歳正月吉日 通塩丁奥村源六板元 筆工近藤清春」とある。本文は、二代目市川团十郎襲名以前の、元禄一〇年（一六九七）正月、まだ幼名の市川九蔵と名乗っていた初舞台からはじまり、享保一二年（一七二七）十一月、のちに、三代目市川团十郎を襲名することになる、養子升五郎の初舞台まで、三一年間の記事を収録する。この間に上演された演目は、外題数にしておよそ一〇四件を数え、その半数以上が挿絵に描かれている。⁽³⁾

『金之揮』は、「江戸歌舞伎における興行年代記の嚆矢として」の意義はもちろんだが、この期間は、まさに長せりふの上

演が定着をみせはじめる時期にあたっており、〈物売り〉のせりふの上演に関する記事も多数、見出される。また、長せりふの衰退と再興についての、同時代の見聞を述べた数少ない証言である点でも注目されるのである。ただし、従来指摘されて来たように、『金之揮』の記事の信憑性には、一部に疑問があり、他の上演資料（番付・狂言本・役者評判記など）によっても、確証が得られない記事も含まれている。これらについては、すでに注（４）の赤間論文における疑義の考証、ならびに土田衛氏の一連の御労作「歌舞伎年表補訂考証」（『演劇研究会報』に現在続行中）が備わる。

二

『金之揮』の宝永元年には、まず、二代目団十郎襲名時の記事が載るが、この記事に続いて、当時の長せりふ流行の推移が回顧されているので、次に掲げる。本文は『珍書刊行会叢書第四冊』（一九一五）所収の影印による。句読点、傍線、（ ）内の注は廣瀬。以下同様。

其比（宝永元年ごろ）ハ四芝居ニて立物役者の出は（端）にハかならずせりふはやりしに、いつの程すたりしに、丑

（宝永六年）ノ年七月盆狂言、中せう姫の時に、けいせいひばり山、くめの八郎の役、もくさうりのやつしに^①、団十郎もぐさのせりふ大きにはやりて、此時より又せりふはやり出、其後、あさをが枕^②、三舛やがあぶら^③売りニテ人にかたらん桜花、くれないわ、そのふにうへてもかくれなしと、段々せりふはやり出、白酒うり、かハらけうり、あふぎ売、ひや水うり、ちやわん、はち、ゆミやげ、ところてん、火打ち、かま、すし売、其外あきんど、つわ物の出はのせりふ、何れの芝居ニても立物役、つらねし也。すなわち、江戸歌舞伎では、宝永初年ごろまでは、出端の芸に必ず「せりふ」（長せりふの意）を述べていたが、いつのころから廃り、宝永六年（一七〇九）七月の盆狂言で市川団十郎が演じた「もくさうりのやつし」が大いに好評となつて、以後、再び長せりふが流行したという。

傍線部①の「けいせいひばり山」はこの時の演目で、山村座の絵入狂言本『けいせい雲雀山』五番統の刊記には「宝永六年丑七月吉日、山村長太夫座、狂言作者津打半右衛門、ゑさうしや三左衛門板」とある。この狂言本によれば、団十郎は中将姫の家来、「くめの八郎」となり、「第四」の奈良木辻の廓で「八

郎はたん十郎、もぐさう（り）と成、女らうに合、たわむれしに、くわさんといふなしミに合、物語するを」とあって、この場面を描いた七丁裏・八丁表見開きの挿絵下段には、もぐさ売りに扮した団十郎が描かれ、三升の紋の下に「せいほうもぐさ／ミますや団十郎」「根本切もぐさ」と書いた荷箱がある（早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇二十五卷『絵人狂言全集』所収。一九八九 早稲田大学出版部）。

なお、本作は盆狂言で、上演時期が七月のためであろうか、役者評判記に「けいせい雲雀山」の芸評は見当たらず、直後の『役者謀火燵』（宝永七年三月刊）江戸巻では、団十郎は山村座に居り、立役之部第八位、位付けは「上上」。まだ立者役者にはなっていない。また、本作上演時の「もぐさうり」のせりふ正本が板行されたかどうかは不明であるが、宝永ごろのせりふ集『せりふ大全』（半紙本、匡郭中本。一冊、刊記なし）表紙見返しに、三升の紋に「せいほう 切もぐさ 三升屋ひやうご」と書いた荷箱を背負い、もぐさ売りとなった団十郎の姿が描かれ、内題を「紋」もぐさ売せりふ市川団十郎」とする、せりふ本文のみが収録されている（稀書複製会本『せりふ大全』第十期第十八回、一九三八 米山堂）。図1・図2



図1

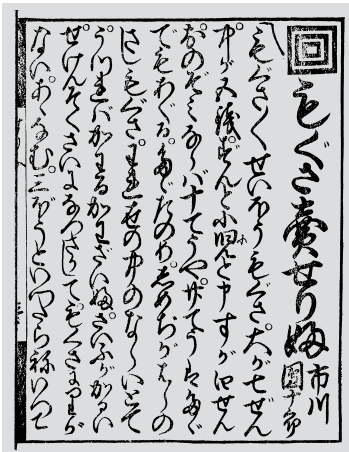


図2

同じく傍線部②の「あさをが枕うり」は、元禄～享保期、上方の若女形、浅尾十（重）次郎のせりふで、これも、後のものを除き本作上演時のせりふ正本が板行されたかどうかは不明。『せりふ大全』表紙見返し of 挿絵の余白に「京都のはり枕まくらゑ」とあり、内題を「（紋）枕そろへせりふあさを／重次郎」とする、せりふ本文のみが収録される。図1・図3

浅尾十次郎が江戸に下ったのは、宝永六年一月で、直後の評判記『役者謀火燵』（宝永七年三月刊）江戸巻に、生島新五郎に伴われて、はじめて江戸の舞台に出た時の記事がある。

新五郎殿に向、道中名所くの物語、かる口にて面白し。

扱、顔みせお国かぶき、則お国と成（若女形之部第二位、

「上上吉 浅尾十次郎 山村座」の条4445）。

早速、挨拶がわりに、新五郎を相手に、下向の道中の名所を「かる口」で述べたのが好評で、続いて十次郎の「お国」の演技が評される。「お国かぶき」が、宝永六年十一月、山村座顔見世「泰平阿国歌舞妃」であることは、同書の生島新五郎評、および山村座の挿絵によって明らかであるが、いずれの記事にも「まくら売り」のせりふにふれるところがない。やや下って、『役者座振舞』（正徳三年四月刊）江戸巻若女形之部第一位「上

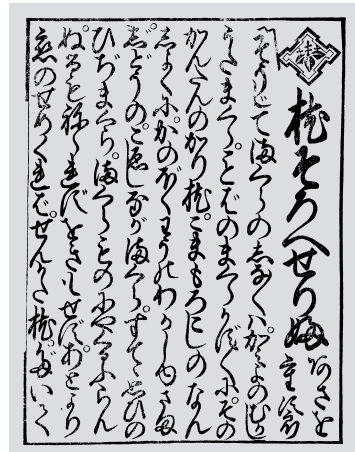


図3

上吉浅尾十次郎 市村座」5184の評文は次のようにいう。

丑ノ霜月二初て山村座へ下り給ひ、お国かぶき当り成りし二、明ル寅の初狂言、けいせい伊豆日記、なまりけいせいにて大当り。三年山村座の立物、枕くはり枕でいよく名高く、此度市村座のお勤。

この記事では、「はり枕」のせりふが述べられた演目は「お国かぶき」か、翌寅年、宝永七年正月の「けいせい伊豆日記」か判断としないが、この場合は「けいせい伊豆日記」の絵入言本（東京芸術大学蔵）に、浅尾十次郎の演技として枕売りと

おぼしき場面が見られないため、「枕くはり枕でいよく」名高くは、「泰平お国歌舞伎妃」についての記事かもしれない。「はり枕」は『枕草子』の下書きを貼る、の意で、翌年の『役者色景図』（正徳四年二月刊）江戸巻5425でも「枕くはり枕でお江戸へ名を上ケ」たという。『せりふ大全』に「京都のはり枕まくらゑ」とあるのも、江戸下りにさいしての京みやげ、という趣向をさすのであろう。

浅尾十次郎はせりふ芸に長けた役者で、上方においても「詞つづき、口上のさはやかさ、無類の仕出し」（『役者御前歌舞妓』京巻3377元禄一六年三月刊）であったが、「当顔みせ（正徳四年一月市村座）円満太平記」では、三升屋助十郎相手の「出るま、のうそばなし」「食を付けさまくいひ立」「せと物せたい道具のせりふ」「長物語り」と、その得意芸を存分に發揮している（以上『役者懷世帯』江戸巻若女形之部第一位、「まれ物上上吉 浅尾十次郎 打つゝき市村座」の条5526、正徳四年正月刊）。

次に傍線部③の「み舛やがあふら売り」については、上演時のものと考えられるせりふ正本「やわらぎ曾我 三舛屋助十郎 あふらうりせりふ」が現存し、絵表紙にみえる板元は「（商標

「ゑ」湯島天神坂下 小松屋」。図中、助十郎が背負う荷箱に「御びん付 三舛屋助十郎」とある。このせりふ正本には座元の記載はないが、現存するせりふ正本では、表紙に演目が記載された最も早い例である⁽⁵⁾。

「やわらぎ曾我」は、正徳六年二月、中村座所演「式例和曾我」と考えてよく、『芝居晴小袖』江戸巻（正徳六年四月刊）、立役之部「右座の六上上（白抜き）三升屋助十郎 勘三郎座」の条に、「此度の曾我到十郎の役（略）びんつけの箱をおい、油うりのせりふよし」（6247）とある。また、文中の「人にかたらん桜花、くれないわ、そのふにうへてもかくなし」とは、せりふ正本冒頭の、次の一文による。

見てのミや人にかたらん桜花、てことにおりていへづとにせん。くれない（紅）は、そのを（園生）にうへてもかくなし、なのらぬさきに、油とは、すいなうき世のれきくさま。

「見てのミや」は『古今和歌集』第一、春歌上五五の素性法師の歌をそのまま引き、「くれないは」は、謡曲『頼政』の「（同上）名乗らぬさきに頼政と、ご覧ずるこそ悲しけれ」をもじったものである。また『金之揮』本文の、正徳六年の記事に

も「申ノ正月狂言は式例やわらぎそが」「芥十郎も油のせりふ此狂言也」という。三升屋助十郎も、せりふ芸を得意としたが、「あふらうりのせりふ」は、助十郎の演じた最初のせりふ正本である。⁽⁶⁾

三

「三舛やがあふら売り」に続いて、「段々せりふはやり出」としてあげられているのは、「白酒うり、かハラけうり、あふぎ売、ひや水うり、ちやわん、はち、ゆミやげ（湯土産）、ところてん、火打ち、かま、すし売」で、十一種を数え、「白酒うり、かハラけうり、あふぎ売」「ところてん」については『金之揮』に記事がある。また「白酒うり、かハラけうり、あふぎ売、ひや水うり」「ゆミやげ、ところてん」「すし売」は、一々数種のせりふ正本が残存するが、諸本で表紙の体裁が一定せず、上演との関係や、板行時期が特定できないものが多い。

次に、『金之揮』の本文と挿絵にみられる、長せりふの記事について、原本の表記を適宜整理して、通覧しておく。

●は〈物売り〉せりふ、○は上記以外の長せりふ。

・上演時初日・座・演目は原則として、挿絵の見出しにより、挿絵には通し番号を付した。別掲【参考資料】「影印・翻刻『金之揮』挿絵」参照。

・評判記で傍証の得られる記事は該当箇所を引用した。本文は『歌舞伎評判記集成』第Ⅰ期による。数字は巻・頁。

・せりふ正本には諸本間に小異があり、上演時の板行と判断できものに限って記載項目をあげた。

・傍線、（ ）内、*は廣瀬注。一部に漢字をあてた。

●宝永六年（一七〇九）丑七月十四日、山村座「中将姫雲雀山」

三番目、（もくさ売り）、くめの八郎団十郎（挿絵16）。

*本文と狂言本の外題は「けいせい雲雀山」。

●正徳三年（一七一三）巳四月五日、山村座「花屋形愛護桜」二番目、しろさけ売り新兵衛、後二あら木左門、生島新五郎（挿絵18）。

*『役者色景図』江戸巻5409（正徳四年二月刊）には「太平愛護若」。同5426に「三月廿六日」。

●正徳四年（一七一四）午七月十四日、森田座「金花山大友真鳥」

三番目、宿禰、後二せい吉たん十郎（扇売り）、今川かん太郎（挿絵20）。

あふぎ売り、切りに（三条）勘太郎と青物売のせりふ（本文）。

●『役者懷世帯』江戸巻、立役第一位「上上吉 市川団十郎」の条に「別て盆狂言、大友の真鳥に兼道と成、扇売のやつ」

「」（5506）

○正徳四年（一七一四）午十一月一日、中村座「万民大福帳」景政と也、五大力宗任と大福帳のせりふ、親父追善ながらのなが口上（本文）。

●（正徳五年（一七一五）未七月、中村座「三ますなごや」。不破伴左衛門役也）（この項、挿絵になし。本文による）。

*「盆替り、不破伴左衛門、関八州に御存の団十郎もぐさと、自身名のりてのもぐさ売」（『役者願紐解』江戸巻6050 正徳六年正月刊）。

*せりふ正本有。図4参照。絵表紙・紋・役者名・せりふ名・板元。なおせりふ名は「もぐさうり」であるが、板行時

期は、同時期のせりふ正本の体裁から判断して、この年とした。

●正徳六年（一七一六）申正月二日、中村座「式例和曾我」（三升屋）介十郎も油のせりふ此狂言也（本文）。

*せりふ正本有。絵表紙・紋・演目・役者名・せりふ名・板元。享保二年（一七一七）酉正月二日、中村座「海道一棟上曾我」（三升屋）助十郎も白酒売のせりふ有（本文）。

*せりふ正本有（団十郎・助十郎連名）。紋・演目・役者名・せりふ名・板元。

●享保二年（一七一七）酉九月九日、中村座「重陽小栗節句」四番目、池の庄司袖岡庄太郎、（団十郎）あをもの掛合いせりふ（挿絵28）。

池庄司袖岡庄太郎と兄弟分にて青物つくしのくぜつのせりふ（本文）。

（三升屋）介十郎かわらけ売のせりふ、此時有（本文）。

*三升屋助十郎のせりふ正本有。絵表紙・紋・役者名・せりふ名。

●享保三年（一七一八）戌正月二日、森田座「若緑勢曾我」二番目、ういらうりせりふ、そかの十郎たん十郎（挿絵

30)。

戌の正月狂言、わかみどり勢曾我に十郎の役、(略)二番目に、ういらう売のせりふ、有て大当り也」(本文)。

*せりふ正本有。図5参照。絵表紙・演目・座・役者名・せりふ名・板元。

なお、「ういらう売のせりふ」は、残存数、異板ともに多く、板元も複数にわたっており、いくつかの系統が認められるが、ここでは上演時の一本を示す。

●享保四年(一七一九) 亥九月九日、中村座「菊重金札祝儀」四番目、久まつ(佐野川) 万きく、たはこうり忠七せりふ、たん十郎(挿絵34)。

九月より(略) なごりはおそめ久松心中、おそめに嵐喜代三郎、久松二万きく也。(団十郎) たはこ売忠七と成、久松二たばこづくしいけんのせりふ、大当り也(本文)。

*せりふ正本有。図6参照。絵表紙・紋・役名・役者名・せりふ名。挿絵34の図様にはほ同じ。

●享保五年(一七二〇) 子正月二日、森田座「樸根元曾我」三番目、(坂田) 半五郎朝いな(朝比奈)、かげかつだんこのせりふ有(本文)。

○享保六年(一七二二) 丑十一月、中村座「鳥坂城鶴巢籠」

(団十郎) 関東小六と也、橋づくしのせりふ(本文)。

●享保七年(一七二二) 寅正月、市村座「大竈商曾我」

二(番目)の詰に三升や(助十郎)と兩人、はこ板はま弓かけ合もんさくのせりふ(本文)。

*享保六年十二月、破魔弓、羽子板、雛、同諸道具、子供もて遊びに致し候人形について、「結構に(豪華に) 仕出間敷候」によって、翌年より禁止の旨、触が出されている

(「御触書寛保集成」三十六「諸商売之部」二〇九八)。

*せりふ正本有。絵表紙・紋・演目・座・役者名・せりふ名・板元。

●享保十年(一七二五) 巳五月五日、中村座「碁盤忠信」半五郎みをのやにて、ところん売のせりふ有(本文)。

●享保十年(一七二五) 巳十一月、中村座「小栗長生殿」一番目、池つくしのせりふ。二番目、大根うりのやつし、七いろのからなの所よし(本文)。

●享保十一年(一七二六) 午正月二日、中村座「門松四天王」切に九年以前森田座にてあたり狂言ういらう売ノせりふ、いつとて、むつかしきこと、こゝめのなまがみく、こみそ

がござるほどこに、なんと、さりとはいよいよ、まはされし長口上（本文）。

*せりふ正本有。絵表紙・演目・座・役者名・せりふ名・板元。

○享保十一年（一七二六）午十一月、中村座「顔見世十二段」

（団十郎）権五郎かげ正と成、太鼓の内より出、あら事にて、たいこづくしのせりふ有（本文）。挿絵53。

*せりふ正本有。絵表紙・演目・座・役者名・せりふ名・板元。

○享保十二年（一七二七）未正月二日、中村座「樺根元曾我」

一番目、そがの十郎（沢村）宗十郎、そかの五郎団十郎、としば（鳥柴）のせりふ（挿絵54）。

兩人長上下にてとしばのせりふかけ合、大でき也（本文）。

*せりふ正本有。絵表紙・演目・座・役者名・せりふ名・板元。

○二番目に小あげと成、米俵を背負ての出端のせりふ、よし（本文）。

（本文）。

*せりふ正本有。絵表紙・演目・座・役者名・せりふ名・板元。

●享保十二年（一七二七）未五月五日、中村座「本領佐々木鑑」あら岡源太団十郎（刀売り）（挿絵57）。

（団十郎）あら岡源太の役にて、せうぶかたな（菖蒲刀）売と也てのせりふよし（本文）。

*せりふ正本有。挿絵57は、「太刀売せりふ、市川団十郎、本領佐々木鑑、中むら座、第二番目、中嶋屋」（明治大学図書館江戸文芸文庫蔵。912.539.28）の図様とはほぼ同じ。

●享保十二年（一七二七）未七月十五日、中村座「脈鞍馬源氏」

二番目、かしま五郎兵衛と也、あめうりのせりふ、だん十郎（挿絵58）。七月より、にぎわいくらま源氏、あめ売かしま五郎兵衛と也てせりふよし（本文）。

*せりふ正本有。ただしケンブリッジ大学図書館蔵（C7

2）の一本のみで、表紙が欠損。内題の「あめうりせりふつらね 市川団十郎」によつたため、当正本の上演時期は確実ではない。

もとより『金之揮』は、二代目市川団十郎の上演記録という性格をもつため、他座の上演状況まで網羅しているわけではないが、ひとまず、右の一覧によつて、宝永六年七月、「もぐさうりせりふ」の上演以降、正徳・享保年間の長せりふ流行の様相を見ることができよう。ここでは長せりふのほとんどが〈物売り〉のせりふであることが、明らかである。

団十郎以外では、この時期に長せりふを得意とし、他座にお

いても長せりふで好評を得ていたのは、三升屋助十郎と坂田半五郎で、兩人ともに、複数のせりふ正本が板行されている。『金之揮』では言及されていないので、次に加えておく。

●享保二年（一七一七）西十一月、中村座「鉢木豊年貢」（返魂丹売）

*『役者三幅対』江戸巻（享保三年一月刊）、敵役之部第二位「坂田半五郎 中村座」の条に、「戌の顔みせ（享保二年十一月）鉢木二定政と成、家頼四人前後つれ、ふり出し、薬づくしのせりふ、坂田はんごん丹とは出来ました」（6566）。

*せりふ正本「返魂丹売」有。絵表紙・紋・座・役者名・せりふ名。ただし、座に「森田座」とあるのは不審。

●享保三年（一七一八）戊正月二日、市村座「七種富貴曾我」（たばこ売）

*せりふ正本三升屋助十郎「たばこ安うりせりふ」有。絵表紙・紋・演目・座・役者名・せりふ名・板元。

●享保六年一月二日、森田座「賑末広曾我」（扇売）

*『役者噂風呂』江戸巻（享保六年三月刊）立役之部六位

「三升屋助十郎 森田座」の条に「当春、末広曾我の十郎役、扇箱にない出、扇二よそへてのせりふ、大出来」（8159）。

*せりふ正本「あふぎうり」有。絵表紙・紋・座・演目（略称「曾我」）・役者名・せりふ名・板元。

また、せりふ正本の表紙の体裁が整って来るのもこの時期だが、図4、図5、図6の正本は過渡的で、図4市川団十郎の「もくさうせりふ」には演目・座がなく、同じく団十郎の図5「外郎売」には紋がない。図6団十郎と佐野川万菊の「たばこつくしいけんのせりふ」は演目・座・板元を欠く。このように流動的な状態を併存させつつも、絵表紙に紋・演目・座・役者名・せりふ名・板元など、上演ならびに板行時の基本情報が記載されるのは、早くは、享保三年正月、市村座「七種富貴曾我」の三升屋助十郎「たばこ安うりせりふ」あたりからで、ほぼ、享保六・七年ごろには体裁が整ったとみてよいであろう。ちなみに、この時期に残存するせりふ正本の多い三升屋助十郎は、のちの三代目市川団十郎こと、升五郎の実父であり、初代団十郎の高弟にして、兄弟のごとくに親交したという。⁽⁷⁾ 享保



図5 「外良売市川團十郎せりふ」



図4 「もくさうりせりふ」



図6 「たばこつくしいけんのせりふ」

十年に五十七歳で没するが、初代団十郎の横死ののち、若くして襲名した二代目団十郎にとって、助十郎が長せりふ流行のさきがけとなったのは、幸いだったといえよう。

四

江戸時代の歌舞伎において、おびただしく上演された長せりふの趣向は、まことに多種多様であるが、そのなかでも（物売り）のせりふは、まちがいなく主要な一角を占めているといえる。それは、まず第一に、振売りの口上がそのまま、弁舌の技としての長せりふに適しているためであるが、そのみならず、

〈物売り〉に扮する役者は、劇中では仮の姿で登場することが重要である。たとえば曾我の十郎が、劇中では方便として、外郎売り（団十郎）となり、油売り（助十郎）となるごとくにある。あるいは、白酒売り新兵衛（生島新五郎）は、実は新木左内の仮の姿であった。

そもそも評判記の芸評に「ふのやき売のやつし」（役者二挺三味線）江戸巻・中村七三郎評、元禄一五年（一七〇二）三月刊、「ふのやき売の略事（やつしごと）」（『江戸桜』中村七三郎評、元禄一五年三月刊）などと記されるように、〈物売り〉の姿は元禄歌舞伎以来の〈やつし芸〉であって、〈やつし芸〉は登場人物の本来の姿ではない別の姿を見せるものである。面白ことに、当時、確固たる人気を誇っていた江戸の立役第一位、中村七三郎の「ふのやき売の略事」には、「しかし此所いかに当風なればとて、三国無双の七三殿がぶたいで麩の焼餅を直に喰はるるは、大きに下卑て見にくし」（同書）という苦言が続いている。いみじくも〈やつし芸〉が本来の姿より卑賤であることを裏腹に述べていて、七三郎の鼻屑にとつては、さもあらんと思わせられるものだが、そうであっても、歌舞伎の人物造型に意外性や陰影を与え、役者の芸風に重層性をもたせるため

には、〈やつし芸〉は、作劇上、欠かせない演技である。上方においても、〈物売り〉のやつしは、しばしば演じられたが、口上や長せりふを伴っていないようである。⁽⁸⁾江戸における〈やつし芸〉としての〈物売り〉の姿は、一定の長さの弁舌をとまなうことによつて、いわば音楽的に完結し、〈やつし事〉という演技の中に、さらに小単位を確立したとみなせよう。その意味では江戸歌舞伎の〈やつし芸〉の一形態は、〈物売り〉の姿として収斂したといえるかもしれない。また、〈物売り〉のせりふは、江戸の荒事といわれる悪態や弁舌の芸が、上方のやつし芸と接点をもったところに流行のきっかけがあったとみることもできるであろう。⁽⁹⁾（図1～6は架蔵本）

注

（1）拙稿「せりふ」の消長とせりふ本——元禄末迄の様相——『愛知女子短期大学研究紀要』第一八号「人文編」、一九八五年三月。

（2）近年の論考に、ビュールク・トローヴェ「二代目市川団十郎の宣伝活動——もぐさ売り初演や享保期せりふ正本を中心に——」（『歌舞伎 研究と批評』52、二〇一四年九月）の〈表

1) に関連するところがある。なお注(46)に指摘される、拙稿目録の、明治大学図書館蔵二本の欠落については、いずれもせりふ正本とは判断しなかった。

- (3) 『金之揮』本文の翻刻と解題ならびに挿絵の影印は立教大学近世文学研究会編『資料集成二世市川团十郎』所収。翻刻桜井美穂子、解題宮本瑞夫(一九八八、和泉書院)。

- (4) 赤間亮「諸芸／評判 金之揮」考(『近世文芸』四六号、一九八七年六月)に諸本一覽を載せる。

- (5) 早稲田大学演劇博物館蔵「特口06-96」

- (6) 拙稿「三升屋助十郎覚書」『論集近世文学』2「歌舞伎」所収、一九九一、勉誠社。

- (7) 「市川栢延舎事録」、『資料集成二世市川团十郎』所収。

- (8) 『役者三世相』京巻(宝永二年四月刊)「立役之部上上 柴崎林左衛門」の条に、「此度いなばの松に(宝永二年三月三日、京、布袋屋座「けいせい因幡松」、白酒亮徳兵衛になられてやつし事、近年の出来物(4041)」。『役者三蓋笠』大坂巻(享保五年一月刊)「立役之部、百人一首源三郎 竹嶋座」の条に「顔見せ(女大名以呂波帯)にいこまの丞と成、国の殿なれ共、出端火桶売のやつしにて出(7506)、など」。

- (9) 武藤純子「江戸の長ぜりふ」(国文学研究資料館編『図説江戸の「表現」』所収、二〇一四)、佐藤恵里「元禄歌舞伎の「やつし芸」(同)が小稿と関わる。

【参考資料】影印・翻刻『金之揮』挿絵
挿絵翻刻凡例

i、便宜上、全図に①～⑥0の通し番号を付した。

ii、用字は原則として原本通りとし、片仮名は残したが、旧漢字は適宜、通行の字体に改め、合字は開いた。なお、一部の演目に用いられる変換不能な漢字は、やむなく通行の字体に換えた。

iii、各図の一行目と座名は罫線で区切られているので、〈見出し〉に該当すると判断し、これらをあわせて各図冒頭の【 】内に掲げた。

iv、図中のちらし書きは、原文の位置に関わらず、番目・役名・役者名・その他、の順に翻刻した。

v、*は当該演目に関する『金之揮』本文の記述を註記した。

() 内は廣瀬注。

vi、本文テキストは『珍書刊行会叢書第四冊』(一九一五年、珍書刊行会)所収の複製本を用いた。複製の底本は未見で所在不明であるが、本書の識語に活字で「文化十四年丁丑三月補表装 本町庵三馬所蔵」とあり、旧蔵者は式亭三馬であろうと思われる。



①【元禄十丑年五月五日 初てのかほミセ 兵根元曾我 中
村座】

市川九藏

市川だん十郎

中むらてん九郎

*「此時今の団十郎八才にて初ノ顔見せ」

②【元禄十一年寅九月九日 源平雷伝記 同座】

きんととき 山中平九郎

なるかミ上人 団十郎

くにつな 九藏

外記上るり



③【霜月朔日より 吉野静基盤忠信 同座】

子たゝわか 九ぞう

さとうたゝのふ だん十郎

よしの山かくはん 大たにひろゑもん

④【卯ノ元禄十二 三月三日より 信田和合玉 同座】

小まつひめ 九藏

弟くに若 弟千弥



⑤ 同年の七月十五日 甲賀三郎／鬼神退治／一心五界玉いつしんごかいのたま（座名なし。中村座）

三ばんめ 夢

手かけミな月（西川岡之助）

むすめくれ竹 九ぞう

かうかの三郎 たん十郎

⑥ 元禄十三年辰二月廿五日より 和国御すいでん もり田ざ

三ばんめ 四番め夢中

あね小松ひめ 兄九蔵

弟ちよ若 弟千弥

＊「此時弟千弥死ス」



⑦【丙（同の誤刻カ）年五月五日 大日本鉄界仙人 もり田さ】

三番め

念力五郎 九藏

そが五郎 市川たん十郎

⑧【同年霜月朔日 金平六條通 中村座】

七ほりどうぜう 平九郎

くわいどう丸 市川九藏

もりちか 横山六郎次



⑨【元禄十四年巳正月二日より
傾城王昭君（座名なし。中村
座）

山上源内左衛門夢中のせきかう 市川だん十郎
子八王 九蔵

⑩【同年五月五日 日本祇園精舎 宝寺／開帳 同さ】
四ばんめ たから寺かいてう
もんかく上人 たん十郎
一念いかづち 九蔵



⑪【同年七月十四日 当世酒吞童子 同ざ】

四はんめ

しきのびしや門 山人の時ろう人 九藏

⑫【同年霜月朔日 葛城呉越戦 同座】

二ばんめ

女ほうやとり木 市川竹之介

あか松むしやの介 市川たん四郎

たんばの介太郎 市川九藏



⑬【元禄十五午霜月朔日 天地人筒守 もりた】

三番め

いつミの小二郎 九藏（暫）

御所ノ五郎丸後ニゑん月入道 松本小四郎

⑭【元禄十六年未霜月朔日 源氏六十帖 市村】

一はんめ

じやまん 勘左衛門（中島）

石山源太 たん十郎



⑮【宝永元年申七月十四日 平安城都定 山村さ】

三はんめ（狂言本では四番目に団十郎）

市川今だん十郎とな のる 大江の八刀（演目未詳、あいごの若の狂言ともいう）

⑯【宝永六年丑七月十四日 中將姫雲雀山 同さ（山村座）】

三はんめ

くめノ八郎 たん十郎

松かへ 四の宮平八

（本文、狂言本の演目は「けいせい雲雀山」）



⑰宝永三年戊七月十四日 信田会稽山しだくわいけいざん 同さ（山村座）（二）

の上演記事は本文になし）

四ばんめ 此所どてしあい

寺島軍そう（善五郎）

ちハラうこん たん十郎

ちハラさこん（新五郎）

⑱正徳三年巳四月五日 花屋形愛護桜はなやかたあいごさくら 同さ（山村座）

二はん目 やねし合（桃燈に、「二丁めつたや」「江戸い
つゝ、」

しろさけうり新兵衛後二あら木左衛門 いくしま新五郎
たはたノ介後二介ろく たん十郎



①⑨【同年七月十四日 義光難波池 同さ（山村座）】

四はんめより出る 七月廿四より（団十郎差合で休、入りなく再勤）

とうへい 平九郎

本たよしてゐる たん十郎

②⑩【正徳四年午七月十四日 金花山友真鳥 森田】

三はんめ

今川 かん太郎

すくね後二せい吉 たん十郎（扇売り）

*「三番目にあふぎ売、切にかん太郎と青物売のせりふ」



②① 正徳四年午ノ霜月朔日 万民大福帳
中村座

一ばん目

むねとう 平九郎 (山中)

こん五郎かげ正 だん十郎

②② 正徳五年未正月二日 板東一寿曾我 (座名なし。中村座)

二番目 とらや寿徳上るり

こもそう後二そかの五郎 (団十郎)



②③ 同年九月九日 和合太平記 同さ（中村座）

三ばんめ

しのつか五郎 たん十郎（卒塔婆引）

くりう左衛門 半三郎（富沢）

②④ 正徳六年申ノ正月二日 式例 和曾我 同さ（中村座）

二ばんめ 江戸半大夫弟子 江戸吉大夫上るりにて出は や

わらき介六ト云

そかの五郎後二あけまきの助六

*「介十郎も油のせりふ此狂言也」



〔25〕同年五月五日 あかねや半七／かさや三かつ 禪師曾我後日

同座（中村座）

二はんめ

せんじほう

あかねや半七 たん十郎

利介 広次（大谷）

〔26〕享保二年酉正月二日 海道一棟上曾我 中村座

二はんめ

かり金文七（市川団十郎）

あんノ平右衛門（宮川八郎左衛門）

ほて市右衛門（坂田半五郎）

かミなり庄九郎（中島三郎四郎）

＊「助十郎も白酒売のせりふ有」



②⑦ 同年五月五日 国性爺宝船 同さ（中村座）

一はんめ

そがの介なり後二二せうぐんかんき 介十郎

五郎時宗後二わとうない たん十郎

②⑧ 同年九月九日 重陽小栗節句 同座（中村座）

四はんめ

たん十郎（小栗くわん蔵）

いけのせうじ 袖おか庄太郎

あをものかけ合せりふ

*「池のせうじ袖岡庄太郎と兄弟分にて青物づくしのくぜつ
せりふ」「介十郎かわらけ売のせりふ此時有」



②⑨【同年ノ霜月朔日 天地人ノ筒守奉納太平記（森田座）】

しのつか五郎 たん十郎 せりふ有

＊「天地人筒守のせりふ」

③⑩【享保三年戊正月二日 若緑勢曾我もり田さ】

二ばんめ

そかの十郎 たん十郎

ういらうりせりふ

＊「団十郎」十郎の役、五郎に庄太郎、兩人かけ合のか、みわりのせりふ有。二ばんめに、ういらう売のせりふ有て大当り也」（図5参照）



③① 享保三年戊霜月朔日 嫁伊豆日記よめいりにつき（座名なし）

かわつの三郎 たん十郎

まんかうこぜん さの川万さく

又の、五郎 伝五郎

＊「しとねの上にてのすもふ」

③② 享保四年亥正月二日 一富士礼拝曾我いちふじらいはいそが（座名なし）（役者

五重相伝』7380に「開關元服曾我」中村座）

二ばんめ

そかの五郎（市川団十郎）

ぬれかみ小しつか 藤村半太夫

＊「ぬれかみ小しつか藤村とテかけ合のせりふ」



③③ 同年四月朔日 後日天まやおはつ／平のや徳兵衛曾我崎心

中（座名なし。中村座）

二はんめ

天まやおはつ 万きく

ひらのやとく兵衛（市川団十郎）

③④ 同年九月九日 菊重金札祝儀（座名なし。中村座）（本

作の演目名はこの見出しのみに記載）

四はんめ

久まつ 万きく

たはこうり忠七せりふ たん十郎

*「九月よりうす雪、くずのうらみの介。なごりはおそめ久松心中。おそめに嵐喜代三郎、久松に万きく也。（団十郎）たばこ売忠七となり、久松二たばこづくしいけんのせりふ大当り」（図6参照）



③⑤ 享保五年子正月二日 樅根元曾我 森た

一ばんめ さつましゆせん上るり

そがの十郎 介十郎

そかの五郎 たん十郎

*「三番め、（坂田）半五郎朝いなかげかつだんごのせりふ有」

③⑥ 享保六年丑正月二日 大鷹賑曾我（同さ）（役者囃風呂）8156に「賑末広曾我」

二はんめ

そがのらうほ 政之介

そかの五郎、与二郎兵衛のせりふ有 たん十郎やつし

*「与次郎のやつし、あみ笠きては、のかんどうのせせう、しうたんよし」



③⑦ 享保七年寅ノ正月二日 大龜 商曾我 中村さ

二はんめ

そかの十郎

よとや辰五郎後二そがの五郎

介十郎たん十郎、かけ合せりふ

*「二つめに三升やと兩人、はご板はま弓かけ合もんさくの

せりふ、まいろくのはや事、江戸中もつはらにはやり

しと」

③⑧ 同年七月十五日 花薨二ツ腹帯 同座

三はんめ

半兵衛 七三郎

おちよ わかの(嵐)

か十郎 だん十郎



③⑨【同年九月九日 九日座禪 達磨（座名なし。中村座）】

ゆめの所後日きやうげん也

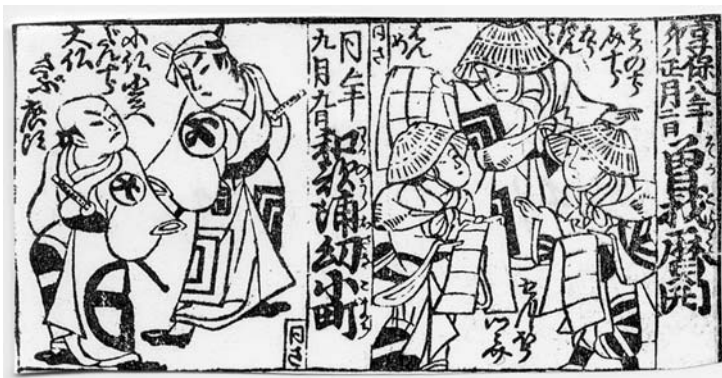
か十郎 たん十郎

半兵衛 七三郎

おちよ わかの

④⑩【同年霜月朔日 豊年太平記（座名なし。中村座）】

さがミのかミせん五郎よしさた たん十郎



④ 享保八年卯ノ正月二日 曾我^{そが}曆^{こよみ}開 同さ(中村座)

一はんめ

そかの十郎 介十郎

五郎 だん十郎

せんしほう 門之介(市川)

*「介十郎、門之介、(団十郎と)三人にてのかけ合せりふ、き、事にて」(三番目「兄弟三人よみうり」『役者有氣振

舞』8394)

④ 同年九月九日 和歌浦^{わかのうら}幼小町^{おこなこまち} 同さ

小仏小兵衛 だん十郎

大仏さぶ 広次



④③【同年霜月朔日 鈴木女教書 同さ】

三ばんめ

さの、源左衛門 たん十郎

なにわづ 山下金作

④④【享保九年辰ノ正月二日 後日松竹鎌倉開（座名なし。中村

座）

一ばんめ

山上源内 たん十郎



④5【享保九年辰二月 入船隅田川（座名なし。中村座）
四ばんめ

ひだり甚五郎後二ひだの四郎 だん十郎
山だの三郎 ぜん五郎（小川）

④6【享保十年巳正月吉日 船玉伊豆日記 中村さ】
さなた与一 だん十郎
又の、五郎 五郎四郎（鳴見）



④⑦ 同年五月五日 碁盤忠信 同ざ（中村座）

一はんめ

さとうたゝのぶ たん十郎

*「半五郎みをのやにて、ところてん売のせりふ有」

④⑧ 同年九月九日 正行定紋節 同ざ

三ばんめ

大もりひこ七 幸四郎（松本）

正つら たん十郎



④9【同年霜月朔日 小栗長生殿 同さ】

一はんめ

いけのせうし たん十郎

いけづくしせりふ

*「一番めにいけつくしのせりふ。二ばんめに大根うりのやつし、七いろのからなの所よし」

⑤0【享保十一年午ノ正月二日 門松四天王 同座】

二ばんめ

なるかミ上人 だん十郎

くものたへま 花さと(山本)

*「親団十郎廿三年忌ついでんのなるかみ上人。(略) 切に九年前森田座にてあたり狂言、ういらう売ノせりふ。いつとてもむつかしきこと、こごめのなまがみくこみそがこござるほどに、なんと、さりとはいよくいゝまはされし長口上」



⑤①【同年五月五日 大桜 勢 曾我 同さ】

介つね 幸四郎

そかの五郎 だん十郎

⑤②【同年七月十五日 末広名護屋 同さ】

三ばんめ

なこや山三 宗十郎（沢村）

ふハのばん左衛門 だん十郎

*「二番めに伴左衛門のせりふに、ちゝぶんじゅんれいの事
共つらねての六法よし」



⑤③ 同年霜月朔日 顔見世十二段 同ざ

一はんめ

こん五郎かけまさ (市川団十郎)

たいこのせりふ

*「権五郎かけ正と成、太鼓の内より出、あら事にてたいこ
づくしのせりふ有」

⑤④ 享保十二年未正月二日 標根元曾我 同ざ

一はんめ

そがの十郎 宗十郎

そかの五郎 だん十郎

としばのせりふ

*「兩人 (宗十郎・団十郎) 長上下にてとしはのせりふかけ

合、大でき也」

*「二番めに小あげと成、米たわらをせをふての出はにせり

ふ、よし」



⑤⑤ 同年三月三日 国性爺竹拔五郎 同ざ

四ばんめ

わとうない だん十郎

*「三月はこんれいおとはの滝」(本文に「国性爺竹拔五郎」の記事なし)

⑤⑥ 同年四月朔日 甲陽軍卯花重 同ざ

三はんめ

けんしん 宗十郎

しんげん だん十郎



⑤7【同年五月五日 本領佐々木鑑（座名なし。中村座）】

あら岡源太 だん十郎

*「せうぶがたな売と也てのせりふ、よし」

⑤8【同年七月十五日 賑鞍馬源氏（座名なし。中村座）】

二はんめ

かしま五郎兵衛と也 あめうりのせりふ だん十郎

*「あめ売かしま五兵衛と也てせりふ、よし」



⑤⑨ 同年霜月朔日 七尺／屏風八棟太平記 同座

二はんめ

くすの木正しげ たん十郎

子正つら 舛五郎

⑥⑩ 市川舛五郎七才二て初の顔ミセ

七歳 舛五郎正つらと成あらことのかほミセ